

早期離床プロトコル導入に関する意識調査

早期離床プロトコルは、離床を実施すべき患者に対して遅れることなく進めるために有効であるが、ルーティンに行うことで個別性のあるアセスメントが欠如する可能性もある。今回、早期離床プロトコルに関するアンケート調査を実施したので報告する。

方 法

調査期間：2016年12月10日～2016年12月18日

調査対象：日本離床研究会教育講座の参加者のうち回答の得られた774名

対象職種：看護師、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、その他医療スタッフ

調査方法：質問紙法（配布）

●設問

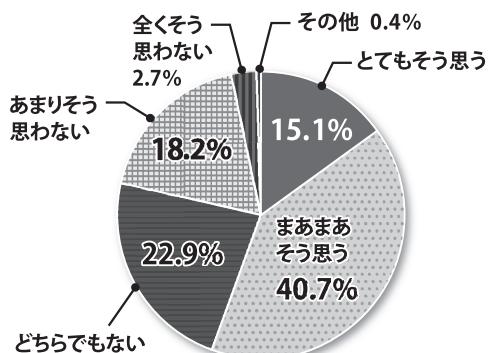
早期離床はプロトコル通りルーティンに進めるべきだと思いますか？（どれか一つ選択）

●回答選択肢

・とてもそう思う・まあまあそう思う・どちらでもない・あまりそう思わない・全くそう思わない

結 果

・アンケート回収総数 774



考 察

本調査では離床プロトコルについてアンケート調査を行った。結果より、半数以上がプロトコル導入に肯定的な回答（とてもそう思う・まあまあそう思う）であった。入院による臥床状態から早期離床をすすめることは、デコンディショニングを予防し、早期回復・早期退院を促すために有用である。早期離床の介入が必要な症例に、介入が遅れることなく適切に実施されるために、早期離床プロトコルは有用なツールである。ICUにおける活動プロトコルの導入は、高いレベルの身体活動を促すために有用である¹⁾、また中枢神経疾患 ICU における離床プログラムの導入により、離床レベルが早く高いレベルまで到達し、ICU 在室期間が短縮、自宅退院時のADL レベルが高い²⁾と報告されている。一方で、プロトコルの欠点としては、プロトコル通りに進められない患者をどのように見つけ、その場合の離床をどのように進めるのかが多くの場合明らかでないことである。プロトコル導入時には離床基準に当てはめ、プロトコル通りに離床を進めるか否かを必ず判断し、全身状態が不安定でプロトコル通りに進めるのは困難であると判断した場合、個別に対応ができるなど、柔軟に対応できる体制が重要である。導入の適応が明確であれば、離床プロトコルを用いることは、早期離床を推進するために有用なツールであると考える。

文 献

- Jolley SE, et al. Hospital-level factors associated with report of physical activity in patients on mechanical ventilation across Washington State. Ann Am Thorac Soc.;12:209-15. 2015
- Klein K et al. Clinical and psychological effects of early mobilization in patients treated in a neurologic ICU: a comparative study. Crit Care Med.;43:865-73. 2015

著者情報：飯田 祥 * 黒田智也 * 土屋 研人 * 岡川元 *
* 日本離床研究会 学術研究部